



極限の貧乏から今日まで 第一話「谷底」編

講演：土井 広文氏

秋田在住の土井広文さん。澤上篤人さんとのご縁で知り合いになった方です。秋田に何度かお邪魔して、セミナーを開催していただきました。お子さんたちとも仲良しになりました。土井さんはすでに仲間を集めて資産運用の勉強会を定期的に行っているそうです。

今年6月に土井さんがお客様を集めてくださり何度目かの秋田での講演が実現しました。遠方も含め、とても多くの方がお出でになりました。特に驚いたのは多くの方が土井さんの話を聞き、この半年ぐらいのうちに実際に投資を始めたということです。これはとてもすごいことです。私も、あちこちで講演をして歩いていますが、時に話を聞いてくださる方のうちどのぐらいの方が実際に投資を始めているのだろうと思うことが多いのです。

きっと土井さんの話には何か人に訴えるものがあるのだろうと思い詳しくお話を聞きました。なるほど、納得です。机上の空論ではない現実のどん底脱出のストーリー、これから三回連載で自ら語っていただきます。(岡本)

「物事に良いも悪いもない。考え方によって良くも悪くもなる。」有名なシェークスピアの言葉です。

私は生きるのを諦めかける程、極限の貧乏を経験しました。でもその事がきっかけとなり、お金とは何かを知り、お金の不安から解放されることになりました。そして、お金は豊かに生きるための一部分でしかなく、お金より大事なものの方がずっと多いことも知りました。あの大変な経験は私の財産であり、極限の貧乏を経験したが故に今があります。

今回から三回連載で、私の極限の貧乏脱出から今日までをお話させていただきます。第一話は、極限の貧乏時代「谷底」編、第二話は谷底からの脱出「再起」編、そして最後は極限の貧乏から脱出を果たした今日の「自立」編です。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

私は1975年生まれの42歳です。家族構成は妻、長男、次男、長女の5人家族です。極限の貧乏を経験したのは今から7年前の2010年の事になります。それまでは上場企業で働き、それなりに収入もありました。仕事は大変でしたが、当時はまだ二人だった子供を育てながら、自宅を新築し、今思えばなに不自由なく生活出来ていました。年収で言えば、貧乏を脱出した今よりもありません。

でも豊かさを感じた事はなく常に気持ちは欠乏していました。もっとお金があれば、もっと豊かになりたい。「勝ち組」、「負け組」という言葉が流行っていた頃です。自分は「負け組だ」といつも思っていました。岡本先生のおっしゃる「足る」を知らなかったのです。



「足る」を知らなかった私は、「自分の可能性に挑戦したい」と妻に転職の相談を持ちかけ、自分なりに一番大変な仕事のイメージを持っていた、住宅営業の仕事に転職しました。要は「もっと」お金が欲しかったのですが…。

自宅を新築すると、さして理由もなく転職をさせる会社の理不尽さが気に入らなかったのもあります。他人の単なる思い付きで自分の人生を振り回されたくないと感じていました。この転職が「終わりの始まり」でした…。ジワジワと神さまのご指導、ご鞭撻が始まりました。

住宅営業の仕事はとても忙しく、休みは全くと言っていい程ありませんでしたが、それなりにお客様が付き始め順調に行くかに思われました。でもこの休みの取れなさが、我が家には致命的な負担でした。

我が家の次男は自閉症の障害を持っています。自閉症の症状は人それぞれですが、家庭に自閉症の子供がいるとなかなか普通の家庭生活を送ることが困難なものです。次男は重度の自閉症のため、何をしてもかすか解らないため、家の中に居ても常に緊張と隣り合わせの生活です。転職前の私は育児や家事を出来る範囲で手伝っており、時々妻の負担や緊張をほぐしてあげることが出来ていたのですが、まったく休みが取れない状況が続いたことで妻に負担が集中し、精神的に完全に参ってしまったのです。

そんな状態に陥った妻が、突然子どもを連れて新幹線で実家に帰ってしまったことがありました。家族のために頑張っているつもりでしたが、お金よりも大切な家庭を見ずにお金を追いかけていたのだと思います。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

家庭を崩壊させる訳には行かず、やむなく退職し再び就職活動をすることになりました。一時的に無職になったため、当時専業主婦だった妻が「これはマズい！！」とすぐに察知し、働きに出ることになりました。妻にとっては更に負担が増えることになったのですが、妻は働き口や子供を預ける保育園の確保に駆けずり回り、短期間に一人で完結させ家計を支えてくれました。そのお陰でなんとか生活を継続することが出来ました。あの時は本当に妻に助けられたと思います。本当に苦労をかけてしまったと今でも思います。

その後、私も何とか働き口を見つけることが出来たのですが、短期間に転職を繰り返した事で年収は150万円にまで減ってしまいました。わずかな蓄えもあっという間に食い潰し、貯金が一円も無い状態に陥りました。

当時、自宅も新築してまだ間もない頃で、住宅ローンの残高はまだ3,000万円以上ありました。毎月の生活は本当にギリギリで、どんなに生活を切り詰めても給料日に払うものを払い終わると手元には3万円しか残りませんでした。その3万円で家族4人が一ヶ月生活をするのですから、毎日一円、十円を削る思いで生活をしていました。着るもの、食べるものはままならず、ほんのわずかでも何か急な出費があった時は食べる物さえ買えない状況が長く続きました。

いつ住宅ローンの支払いが滞るか、いつも自宅を取り上げられる恐怖でいっぱいでした。「こんなことがいつまで続くのだろうか…？」と日々、生きていること自体がとても苦痛だったのを覚えています。毎日、情けない思いとお金が無いことへの恐怖に苛まれながら過ごしていました。生きているのが本当に辛くてなりません。でも悲劇はそれで終わりませんでした。

突然、朝早い時間に実家の弟から電話が来ました。嫌な予感がしましたが、その予感の的中。内容は「父が亡くなった」というものでした。死因は自殺でした。遺書が無かったので自殺の理由は今でも解りません。

貯金が一円も無く、財布にはお金が入っていない状態で、連日お金の話が降りかかって来ました。和尚さんが見えられて「戒名は45万円です。葬儀は和尚一人30万円です。葬儀は一人ではできませんので二人で執り行います」といきなり100万円のお話から始まりました。

もちろんそれだけではありません。さらに何十万円単位の話が連日、続きました。弔問に来られる方へお出しするお茶を買うお金もない状況で連日お金の話です。支払いのめどが全くない、とてつもないお金の話が私の意志とは全く関係ないところで、どんどん進んでいきました。努力で切り抜ける状況ではなく、完全にアウト！！でした「チェックメイト！！」ってやつです。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

お金に振り回されざるを得なかったお陰で、父の死への悲しみから意識をそらすことが出来たのはせめてもの救いだったかもしれません。父の遺産は実家の家屋敷以外にはほとんどなく葬儀にかかる費用は、全て弟と親戚が出しました。長男として情けない思いに、今まで感じたことのない悔しさと情けなさが積み上げる毎日でした。

「人間、お金がなければ死ぬことも出来ない」、「何故、お金はこれほどまでに人を苦しめるのか?」、「お金なんて存在しなければ…」と自宅のトイレにこもり頭を抱えていた日のことを今でもハッキリと覚えています。



でも、悔しさだけではなく、熱い思いも積み上げて来るのを感じました。「誰も助けてはくれない。自分で何とかせねば!!」と…。静かな気持ちの変化でしたが、強い思いでした。自分の中で何かが変わった瞬間だったと思います。ターニングポイントって言うやつです。行き着く所までとことんたどり着いた結果、何かが変わった瞬間だったのだと思います。

何かが変わった私は「そもそもお金とはいったい何なんだ! ?」、「お金持ちとは何なんだ! ?」と静かな疑問が沸き起こったのです。この人生最大、最悪とも思える出来事が後の人生における「最大の財産」になっていくことを、当時の私は知る由もありませんでした。

(第二話「再起」へつづく)